

もくじ

足立姫伝説と木余り如来… P1 はい、文化財係です④花畑遺跡出土の祭祀遺構… P2
お化け煙突60年⑦組織と人員配置… P4



【図1 性翁寺にある足立姫の墓】 東京都足立区扇二丁目19-3の性翁寺の墓域西側にある足立姫の墓。

足立史談

第679号

2024年9月15日

足立区立郷土博物館内

足立史談編集局

〒120-0001

東京都足立区大谷田 5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562

扇の古刹 性翁寺

足立姫伝説と木余り如来

多田文夫

六つの阿弥陀仏をめぐる六阿弥陀詣は、江戸の人々が春秋二度のお彼岸の日に、江戸東郊をめぐる行事として知られていました（「武江年表」ほか）。今回は、とくに六阿弥陀に深く関わる扇二丁目の性翁寺が史跡となる「足立姫」伝説と同寺の「根元阿弥陀」の参考資料をご紹介します。

1 「遊歴雑記」の足立姫伝説

まずご紹介するのは、江戸の僧侶、津田大浄が記した「遊歴雑記」（国立公文書館蔵）です。同書は江戸近郊の紀行文として著名であり、「あだち姫」記事も充実しています。

奈良時代に今の足立を治めていた宮城宰相の娘「あだち姫」（足立姫）が亡くなり侍女も入水したという伝説を紹介した後、とくに別項を設けて姫の菩提を弔う記事を書いています。ここでは抜粋してご紹介します。

■「第壹 性翁寺足立姫の墓」より

第壹

一、武州足立郡宮城村性翁寺は木あまりの如来と称する。…行基菩薩が巡行して滞在していた時、宮城宰相の邸宅に滞在された。宰相の願いで娘の「あだち姫」のため、霊木で六体の阿弥陀様を彫刻された。六体を彫刻しおわたが、い

まだ夜明け前だったので、残りの木でまた一体の阿弥陀を彫刻された。「木余りの如来」というのがこれである。

行基はさらに姫の手に触れたものがあるか？とお尋ねになった。

宮城宰相が、菩提樹で作られた数珠を取り出して、これだけ手元に残っていると語った。…そこで行基は、この数珠で姫の遺体をかたどって弔った。その後、数珠の玉より根と芽が生じて、菩提樹が栄えたのです。

宮城宰相は奇特なことと感嘆して、この塚のそばに庵室を設け、さきの木余り如来を安置して姫と十二人の侍女の菩提を弔いました。

※国立公文書館蔵「遊歴雑記」

三卷天（文化十三年・一八一六年序）所収。

文の後半で、菩提樹で作った数珠の記述がありますが、直径一センチ前後の実を用いた数珠のことで、現在も一般的に販売されています。この数珠から菩提樹が成長するというのが霊威が示され不思議なことがおこったという逸話です。このように木余り如来と足立姫の墓所と菩提樹の関係を端的にまとめています。

筆者の大浄（？）一八三二年）は江戸本所の生まれで小日向にある本法寺の子院、廓然寺の住僧です（廓

然寺は明治に廃されました。子に寺を譲ったのち各地をめぐり「遊歴雑記」を記しました。

2 七仏の「木余り」

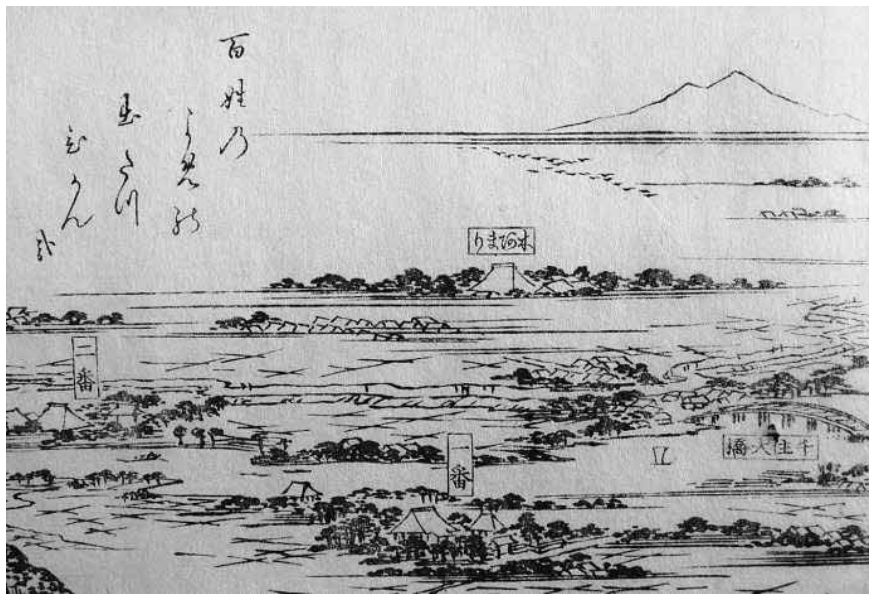
続いて記された伝説から「木余り」と六阿弥陀の關係を見てもよい。江戸東京の歴史をまとめた歴史家・田村栄太郎（一八九三～一九六九）は次のように述べています。

■田村栄太郎「六阿弥陀」より

六阿弥陀は七仏建立を六仏にしたのであるから、余木の宮城を加えて七仏になるわけである。七仏といっても、現代の人にはわからないが、江戸時代には七仏も流行していたのである。

※田村栄太郎『江戸・東京風俗地理』第四卷（一九六五年、雄山閣）所収

この推定もあり得ることでしょう。



【図2】「東都歳時記」掲載の挿図。郷土博物館蔵。部分。
「百姓の嫁の連たつ(たつ)彼岸哉」と六阿弥陀めぐりの俳諧がある。

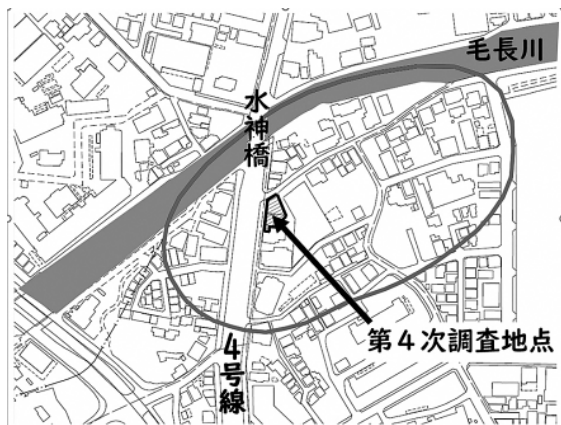
さて江戸の歳時記でも性翁寺は六阿弥陀に関連する重要な寺院として紹介されています。

【図2】は江戸の歳時記の名作「東都歳時記」（郷土博物館蔵）掲載図です。六阿弥陀の寺院とともに図に「木あまり」性翁寺が描かれています。江戸の人々が霊峰として親しんだ富士山と並び称された筑波山を背景として、寺が中心になる位置に見えます。歳時記の筆者は斎藤月岑、挿図は長谷川雪旦・雪堤父子で、当時の江戸の人々の持つ感覚を表現することを得意としていました。象徴的な筑波山と性翁寺、その周辺の地域の描き方は六阿弥陀巡りに対して人々が持つイメージを表現しているといえるでしょう。

これらの資料は足立姫の伝説と性翁寺の歴史を伝えつつ、江戸の文化や、当時の人々の感覚、また足立をどのように捉えていたのかを知る好資料です。あらためて史跡を訪ねてみてはいかがでしょうか。

※六阿弥陀＝一番西福寺（北区豊島）、二番延命寺（現、恵明寺、足立区江北）、三番無量寺（北区西ヶ原）、四番与楽寺（北区田端）、五番常楽院（元、台東区上野。現在は調布市）、六番常光寺（江東区亀戸）

（郷土博物館学芸員）



はい、文化財係です ④④

花畑遺跡出土の

祭祀遺構

伊興遺跡公園展示館2階で花畑遺跡の速報展を展示しています。これまで展示する機会の少なかった花畑遺跡をご紹介します。

【花畑遺跡】

花畑遺跡は、花畑5丁目および西保木間4～5丁目目所在する古墳時代から近世にかけての複合遺跡です。足立区の北部に位置し、東京都と埼玉県の県境を流れる毛長川の右岸下流域に形成された標高3メートル前後の微高地に立地しています。古墳

時代中期から後期(5～6世紀)に最も繁栄した伊興遺跡と同時期の遺跡と考えられます。

過去の調査では、朝鮮半島系の土器や須恵器、大量の土師器や石製模造品などが見つっています。朝鮮半島系の土器とその同一遺構から出土した遺物は今年の1月に足立区登録有形文化財に指定されました。足立史談672号と673号で朝鮮半島系の土器について詳しく紹介しています。

【花畑遺跡第4次調査】

花畑遺跡では、今までに3回の本発掘調査が行われました。今回の第4次調査は、令和4

年7月～9月に行われた保木間5丁目地点での調査で、古墳時代中期から後期を中心とした遺構と遺物が検出されました。そのなかに祭祀関連遺構と考えられる遺構もあります。

【63号遺構】

調査地の遺構は整理作業の際に番号を振って表します。第4次調査では、1号～244号まで遺構がありました。その中で、特色のある6

3号遺構をご紹介します。

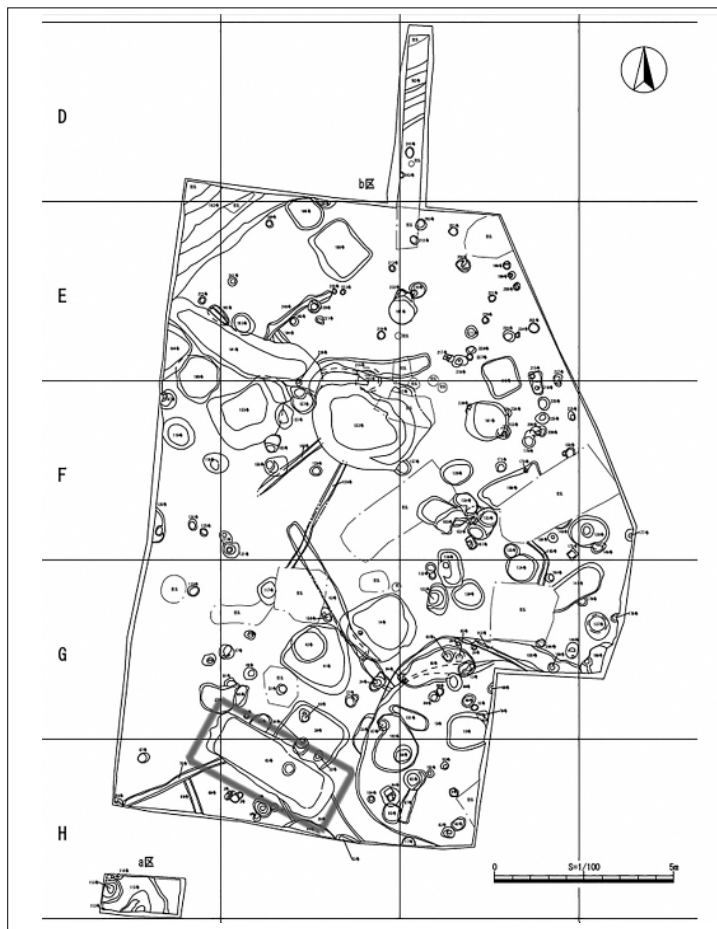
63号遺構は長軸3.83メートル、短軸1.24メートル、深さ0.89メートルの平面長方形の形状をした土坑です。土層は黒褐色土を主体として18層に分層できます。18層を大きく上層・中層・下層に分けると、上層は黄褐色の粘土質の土を多く含み、下層は炭化物を主体とし土器片を多く含みます。

中層はその中間で、比較的中形の破片や完形に近い遺物が出土しています。上層と下層にはそれぞれ中央部に細い穴状に掘り込まれた層が存在します。どちらも完形遺物は出土

していませんが、土師器を中心に土器片が多く出土しました。また、各層の上部に焼土と炭化物が層状に堆積しています。これは、土器片を埋めた後に火を焚いた可能性が高く、火を使用した儀式的の痕跡と考えられます。

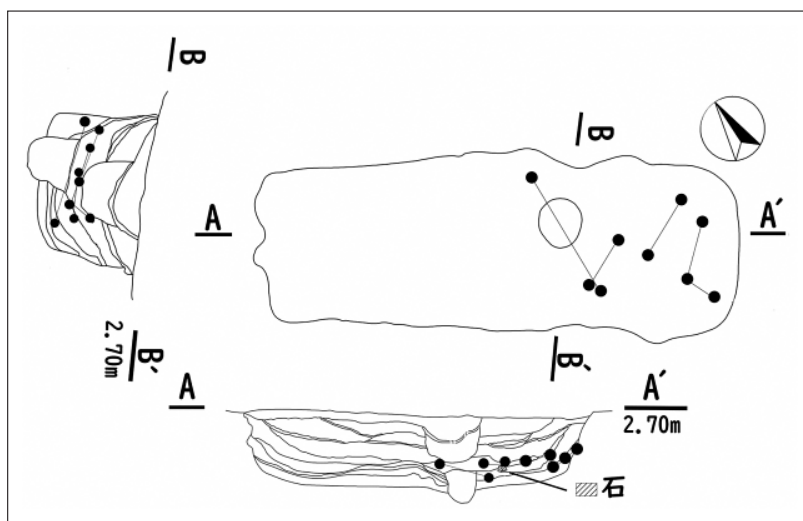
祭祀遺構には、そこで祭祀を行っていた痕跡のある遺構や、祭祀で使った土器などを器種ごとにまとめて置いて廃棄した遺構や、層位ごとに器種を選別して廃棄した遺構などがあります。63号遺構はそういった傾向はありません。

土器の出土状況は、破片が主体で小片や表面が摩耗しているものが多くみられます。完形の遺物や赤彩の施されたものは全ての層から出土します。また、「図2」で示したように上層と下層で出土した破片が接合することから、63号遺構における上層と下層との埋め戻し時期に差異はなく、人為的に埋め戻されたと考えられます。そのため、いくつかの完形遺物と別の場所で破砕された土器をまとめて遺棄した可能性が考えられます。このことから、63号遺



【図1】花畑遺跡第4次調査遺構図

調査地域内の遺構の位置。63号遺構は枠線のなか。



【図2】63号遺構土器破片接合図

●は土器破片。遺構のなかでの出土位置を示し、接合するものを、線で結んでいる。

構は祭祀に使用された土器などを廃棄した遺構と推定されます。

弥生土器、土師器、須恵器、土製品、焼成粘土塊、石器、石製品、骨角製品などが出土しました。

【弥生土器】

これまでの足立区内の遺跡の発掘調査では、弥生時代の遺構は検出されていませんが、ごくまれに古墳時代の遺物に交じって縄文土器や弥生土器の小片がまぎれていることがあります。今回の調査でも、古墳時代の土坑を覆っていた土の中から弥生土器が数点出土しました。このことは、この地に居住とまではいかないうちにせよ、弥生時代後期には何らかの人々の活動があったと考えられます。
(遺跡発掘調査員 上野未来)

花畑遺跡Ⅳ速報展
12月28日まで

会場 伊興遺跡展示館(入館無料)
会館時間 午前10時～午後4時



お化け煙突60年 ⑱

組織と人員配置
格和 宏典

お化け煙突で知られる千住火力発電所は、昭和三十八年(一九六三)に、発電停止を迎えました。

■晩年の組織 入社した昭和三十六年(一九六一)から廃止までの人員は、稼働状況や年代によりバラツキがあり、総人員と個別人員とが合致しません。総人員は二四〇(二五〇名程度)だったと思います。内訳は、社員が二二〇名前後、残りは社員に準ずる常用(じようよう)職員でした。社員のうち、事務系が五〇名、技術系が一七〇名前後で、電気・汽機・汽缶の三交代勤務者が一一〇名程度、残りは日勤者でした。

■要員の推移 昭和三十三年頃から廃止準備に入り、所員は新鋭火力に転出し減少を続けましたが、昭和三十六年冬の異常渇水による電力不足に対処するため東電として総動員体制で臨むことになりました。

このため、旧火力の千住および鶴見の両火力も全力運転の体制をとらざるを得なくなり、昭和三十六年一月一日以降、千住火力発電所は終日運転に対応しうる完全三直三交替制となり、筆者が入社した三十六年四

月は、全ての火力発電所が臨戦態勢下の要員充足期でした。このため、千住火力発電所のベテランを新鋭火

千住火力発電所組織表(昭和36年)	事務次長	総務課	庶務係
			労務係
			経理係
			資材係
	技術次長	電気課	運転係(発電機の運転操作)
			作業係(電気関係の保守)
		機械課	汽機係(タービンの操作および保守)
			汽缶係(ボイラーの操作および保守)
			作業係(運炭・貯炭・重油などの燃料に関わる作業電気関係の保守)
			工作係(汽機・汽缶・燃料設備に関わる補修など)

力に転出させつつ、新入社員による補充を余儀なくされたのです。

廃止準備のための人員減は、当面の運転に備えた汽機(タービン)、汽缶(ボイラー)の人員を確保しつつ燃料関係を扱う作業係に最もしわ寄せがおよび、最小限の設備保全しか行わない状況でしたから、本格運転に対する準備は大変なものがあつたと聞いています。

昭和三十七年三月、非常時を脱したのか運転(発電する行為)を運転、発電に携わる交替勤務者を運転員と呼んでいました)が停止しました。職場の誰もが、「危機を脱したんだらうからこのまま廃止だらう」と語り合っていました。三十七年七月に入り再稼働となりました。

再稼働から本格停止までのいきさつは、足立史談 第六六一号「お化け煙突60年①発電停止」をお読みください。

運転停止中は交替勤務が小さく、夜勤は、設備保守担当を除き解除になりました。筆者はその担当に任せられ、ただひとり夜勤業務をこなしましたが、誰もおらず静まり返った中での巡回、誰もいない仮眠室での就寝など特異な体験をしました。

(元千住火力発電所職員)